

大学昇格運動の「経験」的基盤

—佐多愛彦における研究と運動のあいだ—

*吉 川 卓 治

はじめに

- 1 病理学研究者への歩み
- 2 二つの調査報告
 - (1) 小田原コレラ調査
 - (2) 北海道脚気調査
 - (3) 住民に対するまなごしの転回
- 3 研究の展開と社会的活動
 - (1) 市立富山病院から大阪医学校へ
 - (2) ペスト対策への取り組み

おわりに

はじめに

1918年に大学令が制定されるまで大学として法的に認められていたのは、帝国大学令に基づいて設置された官立の総合大学たる帝国大学だけだった。帝国大学の卒業生には学士称号や文官任用などの面で特権が付与された。このため私立の専門学校を大学として認めるように求める大学昇格運動が私学関係者を中心に展開された。その中で公立学校を足場にこの運動に取り組んだのが佐多愛彦（1871～1950年）だった。

佐多は中学校卒業後に高等学校を経て進学する大学と、中学校から直接進学のできる専門学校の二つのルートに分かれた医師養成を大学に統一すべきだとする医育統一論を世論にうたえて政府との交渉を重ね、自身が校長を務める大阪府立医学校（1901年に大阪医学校を改称。1903年に大阪府立高等医学校、1915年に専門学校令に基づいたまま府立大阪医科大学と改称）を1919年に大学令による初めての公立大学である大阪医科大学に昇格させた人物として大学史・高等教育史では知られている。

だが、佐多はもともと病理学あるいは病理解剖学を専門とする医学研究者だった。どうして、もっぱら研

究室に閉じこもり顕微鏡を覗き込むことを職務とする基礎医学研究者が社会や行政に働きかける運動に熱心に取り組んでいくことになったのか。この跳躍の土台には大学の外の世界とかがわるといふ「経験」があったのではないか。そこで本稿は、病理学研究者としての歩みを始めてから運動を開始するまでの時期において、佐多がどのように大学の外の世界とのかかわりをもつようになったのか明らかにすることを課題とする。なお本稿ではさしあたり「経験」を、後の行動や選択に際して判断に重要な影響を与えたとみられる知識や見方を得る機会というような意味で用いている。

佐多は、鹿児島で生まれ鹿児島医学校を卒業後、家族とともに東京に出た。そして1888年9月に帝国大学医科大学の撰科に入学した。撰科入学から1年半後の1890年2月に医科大学病理学教室の「補助」、「雇」に採用され補助的業務を担った。1893年5月に市立富山病院の当直医として赴任し、1894年3月には大阪医学校教諭へと転じた。その後ドイツへの留学（1897年5月～1900年7月）をはさんで1902年5月に31歳の若さで大阪府立医学校の校長兼病院長となった。

佐多の70歳までの経歴は古稀記念に編まれた『佐多愛彦先生伝』（以下『佐多伝』と記す）に詳しい¹。同書は佐多の口述や書簡・写真などをもとに執筆されたもので、本稿も多く参照したことを付言しておく。

* 名古屋大学大学院教員

1 病理学研究者への歩み

まずは佐多が入学した時期の帝国大学における「医科大学撰科生規程」(1886年5月27日制定)により医科大学の撰科に関する規定を確認しよう。第二項で「医科大学ニ於テハ文部大臣ニ於テ認可スル医学校ニ於テ卒業シタル者若クハ医科大学ノ試問ニ応答シ之ト同等ノ学力アル者ニ限り前項ニ準シ之ヲ許可ス」とされ、入学資格については第四項で「撰科生ハ年齢十九年以上ニシテ第二項ニ掲ケル医学校ニ於テ卒業シタル者ノ外撰科主管ノ教授ニ於テ試問ヲ為シ所撰ノ課目ヲ学修スルニ堪ユル者ニ限り其入学ヲ許可スルモノトス」と定められていた²。医術開業免許を持たない者や医学校卒業者以外にも門戸を開いていたことがわかる。

しかし佐多は明治4(1871)年9月生まれなので、入学時点では17歳、数えでも18歳だったから規定上では年齢制限に抵触したはずである。加えて『佐多伝』によれば、鹿児島医学校在学中に興味を持ち、得意科目だった外科と病理学で受験したのだが、病理学の試験はあまりできなかった。それにもかかわらず、病理学の主任教授三浦守治の意向で撰科生となることが認められたという³。主任教授の裁量がかなり大きかったのではないかと推察される。

佐多が入学した年の医科大学には38名の撰科生が在籍していた⁴。そのうち病理学には、江波知輝、桂田富士郎、遠山椿吉、山谷徳治郎などがいた。江波は、後述のように佐多と前後して医科大学の「補助」や「雇」となり、後に東京府内で開業した⁵。桂田は修了後、岡山医学専門学校教授などを務め、日本住血吸虫病を発見したことで知られる。遠山は顕微鏡による検査や講習会を行なう東京顕微鏡院を創設した人物である⁶。山谷は後年、医海時報社を設立して雑誌『医海時報』を創刊する⁷。佐多が医育統一論を提唱した「医育論」を掲載したのも『医海時報』だった。そこには山谷との撰科以来の交流も関係していたとみられる。

病理学教室の主任教授だった三浦は、佐多に「魚類における運動神経終器の検索」を研究課題として与えた。このテーマはもともと三浦がドイツ留学中に取り組んだ「横紋筋繊維の運動神経終器に関する研究」を継承したものだ。その実験で用いた染色法を三浦は佐多に口授して懇切に指導したという⁸。

だが、医学雑誌に佐多の名前が初めて登場するのはこのテーマではない。撰科入学から富山病院に赴任するまでの間に佐多が発表した論文等をリスト化した表1で確認しておこう。最初の著述は病理学教室で助手を務めていた竹崎季薫との共著で『東京医学会雑誌』

第3巻第16号(1889年9月5日)に掲載された「結核病屍剖観記事」⁹だった。佐多は同誌の次の号にも竹崎との共著で「胃癌病屍剖観記事」¹⁰を発表した。がん研究は、コールタールを使ってウサギの耳にがんを初めて人工的に発生させた研究で後に有名になる山極勝三郎との共同でも行なった。佐多にとってもがん研究は結核とならぶ主要テーマの一つだった。

佐多は三浦から与えられた研究テーマについて成果をまとめると「運動神経終器ニ関スル研究成績」として『東京医学会雑誌』第4巻第5号に発表した。この研究は、従来カエル、イモリ、ウサギについて明らかにされてきた「神経終器」が魚類ではどのような形状をしているかを解明しようとしたものだった。

その直前の2月27日付で佐多は病理学教室「補助」となった。『佐多伝』によれば「補助」は「助手の助手」のようなもので、月給は10円だった。医科大学からの辞令は出るものの、学内規程には特段の定めはなかった。撰科卒業は4月18日だったから、採用後しばらく撰科に在籍していたことになる。さらに1891年4月28日付で医科大学の「雇」となり、月給10円を支給されることになった。「雇」は雇員の一種だったが¹¹、同じく「雇」を務めていた江波とともに1893年2月14日付で「俸給支給」が停止され、5月25日付で「補助」も依願退職し¹²、富山市の市立富山病院に当直医として赴任した。

この間、佐多は研究を通じて、観察の対象を顕微鏡の下の標本から外の世界へと拡大する機会を得ていく。研究成果発表の場は、当初『東京医学会雑誌』に限られていたが、「雇」になってからは『中外医事新報』『東京医事新誌』『医事新聞』へと広がり、抄録や抄訳が多いもののハイペースで研究成果を公表した。研究対象も従来からの結核とがんに加えて、腸チフスやコレラ、ロベルト・コッホ(Robert Koch)が結核治療薬として発表したばかりのツベルクリンなど、当時世界的に関心を集めつつあった細菌学上のテーマにも広げつつあった。

こうした病理学・細菌学的な研究が並ぶなか、異彩を放つのが1891年から一部翌年にかけて『東京医学会雑誌』に掲載された、小田原と北海道をフィールドとする二つの調査報告である。これらの調査は佐多にとって大きな意味をもつものだったと考えられるので、節をあらためて検討しよう。

表1 佐多愛彦の著作一覧（1889～1893年）

No.	西暦	月日	タイトル	掲載誌	巻号
1	1889	0820	「結核病屍剖観記事」（竹崎季薫・佐多報）	東医学	3(16)
2	1889	0905	「胃癌病屍剖観記事」（竹崎季薫・佐多報）	東医学	3(17)
3	1889	1020	「脳出血病屍剖検記事」（抄）	東医学	3(20)
4	1889	1205	「尿管ニ於ケル多発性皮膚壊死及ヒ粘膜潰瘍」（抄）	東医学	3(23)
5	1889	1220	「皮膚、神経及ビ神経節ノ多発性纖維腫（其一部ニ肉腫様変質アリ）」（抄）	東医学	3(24)
6	1890	0120	「瀰漫性脳硬変」（抄）	東医学	4(2)
7	1890	0205	「肝臓膿腫ノ実験記事」（江波知輝・佐多共述）	東医学	4(3)
8	1890	0205	「胃癌ノ実験」（山極勝三郎・佐多共述）	東医学	4(3)
9	1890	0205	「脚気患者剖観記事」	東医学	4(3)
10	1890	0220	「肝臓膿腫実験記事（前号続稿）」（江波知輝・佐多共述）	東医学	4(4)
11	1890	0220	「胃癌ニ就テ（前号続稿）」（山極勝三郎・佐多共述）	東医学	4(4)
12	1890	0220	「多発性脊椎硬変初期及急性脊髓炎」「腎臓ノ代償性肥大及生理的發育ニ就テ」（抄）	東医学	4(4)
13	1890	0305	「運動神経終器ニ関スル研究成績」	東医学	4(5)
14	1890	0305	「胃癌ニ就テ（続稿）」（山極勝三郎・佐多共述）	東医学	4(5)
15	1890	0305	「横紋筋再生ノ試験的検索」「肺癆」（抄）	東医学	4(5)
16	1890	0320	「手指末節ノ転移腫ヲ有セル気管原発性癌ノ一症」（抄）	東医学	4(6)
17	1890	0425	「第二「チナオザリチール」酸曹達」「ヒオスナチン」ニ就テ」（抄訳）	中外	(242)
18	1890	0505	「療癰（淋腺膿結核）ニ就テ」（堀義水・佐多共述）	東医学	4(9)
19	1890	0505	「撓骨動脈栓塞ノ一症」「癩病ハ伝染性ヲ有スルカ」（抄）	東医学	4(9)
20	1890	0510	「安賀賦貌林中毒」（抄訳）	中外	(243)
21	1890	0525	「「ルフォナル」ノ効力」「クロラル、アミード」ニ就テ」「「グアコ」ノ効力」（抄訳）	中外	(244)
22	1890	0605	「炎性白血球増多」（抄）	東医学	4(11)
23	1890	0610	「左頸動脈ニ於ケル原発性血塞ノ一症」「移動性ノ心臓」（抄訳）	中外	(245)
24	1890	0705	「胃癌ノ一症」	東医学	4(13)
25	1890	0720	「幼児ニ於ケル特発性肉腫ノ二症」「硝子様血塞」（抄）	東医学	4(14)
26	1890	0725	「腸空扶斯ニ於ケル咽頭及喉頭ノ疾患」「穿孔性胃潰瘍」（抄訳）	中外	(248)
27	1890	0805	「腸空扶斯ニ於ケル穿孔性腹膜炎ノ一症」	東医学	4(15)
28	1890	0810	「悪性腫瘍ニ対スル丹毒ノ効力ノ一例」（抄訳）	中外	(249)
29	1890	0905	「全身ニ於ケル皮脂腺（毛孔）配布ノ概況」	東医学	4(17)
30	1890	0920	「腸空扶斯ノ合併症及後発病ニ関スル病体解剖上ノ検索」	東医学	4(18)
31	1890	1005	「腸空扶斯ノ合併症及後発病ニ関スル病体解剖上ノ検索（前号続）」	東医学	4(19)
32	1890	1020	「腸空扶斯ノ合併症及後発病ニ関スル病体解剖上ノ検索（前号続）」	東医学	4(20)
33	1890	1105	「小児ノ結核ニ就テ」（抄）	東医学	4(21)
34	1890	1120	「胃癌ノ一症」	東医学	4(22)
35	1890	1205	「熱ノ原因ニ就テ」「グリナム氏ノ脚気病ニ関スル報告」（抄）	東医学	4(23)
36	1890	1220	「肝臓ニ於ケル退行機能」（抄）	東医学	4(24)
37	1891	0105	「肺臓肉腫ノ一症」（抄）	東医学	5(1)
38	1891	0125	「心臓血塞ノ実験報告」	中外	(260)
39	1891	0205	「明治二十三年小田原地方虎列刺病調査報告」	東医学	5(3)
40	1891	0205	「胸部大動脈動脈瘤ノ実験記事」（山極勝三郎・佐多共述）	東医学	5(3)
41	1891	0205	「脳ノ病理的変化ニ於ケル饒肥細胞ノ発生ニ就テ」（抄）	東医学	5(3)
42	1891	0210	「心臓血塞ノ実験報告（続）」	中外	(261)
43	1891	0220	「明治二十三年小田原地方虎列刺病調査報告（続）」	東医学	5(4)
44	1891	0220	「脳ノ病理的変化ニ於ケル饒肥細胞ノ発生ニ就テ（続）」（抄）	東医学	5(4)
45	1891	0221	「コッホ氏治療薬ヲ注射シタル両結核症ノ解剖的所見（千八百九十年十一月二十七日慈恵医員会ニ於テ）」（イスラエル述・佐多訳）	東医新	(673)
46	1891	0225	「心臓血塞ノ実験報告」	中外	(262)
47	1891	0228	「大腸空扶斯ノ一好例」	東医新	(674)
48	1891	0305	「肺臓骨肉腫」（抄）	東医学	5(5)
49	1891	0307	「肺結核患者ニ対スルコッホ氏薬応用後ノ新陳代謝機（Deut. med. Wochenshr. No.2. 1891）」（ヒルシユフヘルド述・佐多訳）	東医新	(675)
50	1891	0307	「コッホ氏薬ノ内臓結核ニ対スル効験ニ就テ」（ルドルフ・ウィルヒョウ述・佐多訳）	医事新聞	(348)
51	1891	0310	「五人ノ癩病患者ニコッホ氏薬ヲ用ヒタル実験」（ユリユウス、ゴールドシュミット述、佐多訳）	中外	(263)
52	1891	0314	「大腸空扶斯ノ一好例（承前）」	東医新	(676)
53	1891	0314	「肺結核患者ニ対スルコッホ氏薬応用後ノ新陳代謝機（承前）」（佐多訳）	東医新	(676)
54	1891	0320	「明治二十三年小田原地方虎列刺病調査報告（続）」	東医学	5(6)
55	1891	0320	「含油性皮様囊腫ニ巨態細胞」（抄）	東医学	5(6)
56	1891	0322	「コッホ氏薬ノ内臓結核ニ対スル効験ニ就テ（承前）」（ルドルフ・ウィルヒョウ述・佐多訳）	医事新聞	(349)

大学昇格運動の「経験」的基盤

No.	西暦	月日	タイトル	掲載誌	巻号
57	1891	0325	「五人ノ癩病患者ニコツホ氏薬ヲ用ヒタル実験(続)」(ユリュウス, ゴールドシュミット述, 佐多訳)	中外	(264)
58	1891	0405	「明治二十三年小田原地方虎列刺病調査報告(続)」	東医学	5(7)
59	1891	0405	「気管枝炎及気管枝拡張ニ於ケル詳細ノ変化」(抄)	東医学	5(7)
60	1891	0410	「コツホ氏薬彙報数件」(抄訳)	中外	(265)
61	1891	0420	「明治二十三年小田原地方虎列刺病調査報告(続)」	東医学	5(8)
62	1891	0420	「胃ノ円形潰瘍底部ニ於ケル胃癌発生ノ一症」(抄)	東医学	5(8)
63	1891	0422	「前額竇水腫患者一脳腫瘍一死亡」(田代義徳述・佐多剖検記事)	医事新聞	(351)
64	1891	0425	「ツベルクリン」コツホ氏薬ヲ名スノ効験力ニ対スル組織学上ノ研究報告」(ドクトル, クロマイエル述, 佐多訳)	中外	(266)
65	1891	0505	「明治二十三年小田原地方虎列刺病調査報告(続)」	東医学	5(9)
66	1891	0520	「明治二十三年小田原地方虎列刺病調査報告(続)」	東医学	5(10)
67	1891	0523	「急性腸壁嵌頓症ノ追加」「肥大性亜爾個保児肝硬変」「膀胱腫瘍ニ就テ」(抄訳)	東医新	(686)
68	1891	0525	「ツベルクリン」コツホ氏薬ヲ名スノ効験力ニ対スル組織学上ノ研究報告(続)」(ドクトル, クロマイエル述, 佐多訳)	中外	(268)
69	1891	0605	「明治二十三年小田原地方虎列刺病調査報告(続)」	東医学	5(11)
70	1891	0605	「実扶の里ノ治療法ニ就テ」(抄)	東医学	5(11)
71	1891	0606	「続発癌ノ危害ニ就テ」	東医新	(688)
72	1891	0610	「癩病ニ対スル「ツベルクリン」ノ効験」(ドクトルユウリアス, ゴールドシュミット述, 佐多訳)	中外	(269)
73	1891	0620	「右側復輪尿管之一症」	東医学	5(12)
74	1891	0620	「続発癌之危害ニ就テ」	東医新	(690)
75	1891	0625	「肺結核ノ比較の治癒ニ就テ」	中外	(270)
76	1891	0705	「右側復輪尿管之一症(続)」	東医学	5(13)
77	1891	0710	「肺結核ノ比較の治癒ニ就テ(続)」	中外	(271)
78	1891	0810	「肺結核ノ比較の治癒ニ就テ(続)」	中外	(273)
79	1891	0920	「北海道出張取調報告(其一)」	東医学	5(18)
80	1891	1005	「北海道出張取調報告(其二)」	東医学	5(19)
81	1891	1010	「肺結核ノ比較の治癒ニ就テ(続)」	中外	(277)
82	1891	1020	「北海道出張取調報告(其三)」	東医学	5(20)
83	1891	1105	「北海道出張取調報告(其四)」	東医学	5(21)
84	1891	1120	「北海道出張取調報告(其五)」	東医学	5(22)
85	1891	1205	「北海道出張取調報告(其六)」	東医学	5(23)
86	1891	1220	「北海道出張取調報告(其七)」	東医学	5(24)
87	1892	0130	「ツベルクリン」ノ構成」(クレープス述・佐多訳)	東医新	(722)
88	1892	0205	「北海道出張取調報告(其八)」	東医学	6(3)
89	1892	0205	「原発性肺臓肉腫」(抄)	東医学	6(3)
90	1892	0206	「ツベルクリン」ノ構成(承前)」(クレープス述・佐多訳)	東医新	(723)
91	1892	0215	「脊髄癆ヲ合併シタル筋萎縮性側索硬変ノ一症(通常会所演)」	順天堂	(123)
92	1892	0220	「脊髄癆ヲ合併シタル筋萎縮性側索硬変ノ一症」	東医新	(725)
93	1892	0225	「皮膚弾力繊維ノ老衰変化」(抄)	東医学	6(4)
94	1892	0229	「脊髄癆ヲ合併シタル筋萎縮性側索硬変ノ一症(前号続)」	順天堂	(124)
95	1892	0305	「癩病ノ病理解剖ニ就テ」「副腎結核トアチソン氏病」(抄)	東医学	6(5)
96	1892	0320	「脊髄ノ壳化」「結核性ノ脳膜炎病理解剖記事」(抄)	東医学	6(6)
97	1892	0405	「続発性胃癌ニ就テ」「死亡ノ転帰ヲ取レル腸壅扶斯二千人合併症ニ就テ」(抄)	東医学	6(7)
98	1892	0430	「脊髄癆ヲ合併シタル筋萎縮性側索硬変ノ一症(第七二五号ノ続)」	東医新	(735)
99	1892	0505	「小兒ノ膿胸」「肺炎「コッケン」ニ因ル咽頭炎」(抄)	東医学	6(9)
100	1892	0611	「ツベルクリン」ノ効用及該薬応用ノ結果トシテ従来報告セラレタル病理解剖の所見」(リッベット述・佐多訳)	東医新	(741)
101	1892	0620	「癌腫ノ伝染力」「腹膜結核ノ発生」(抄)	東医学	6(12)
102	1892	0625	「ツベルクリン」ノ効用及該薬応用ノ結果トシテ従来報告セラレタル病理解剖の所見(承前)」(リッベット述・佐多訳)	東医新	(743)
103	1892	0720	「麻痺癩ニ於ケル病理解剖(殊ニ脊髄ニ就テ)ノ追加」(抄)	東医学	6(14)
104	1892	0723	「ツベルクリン」ノ効用及該薬応用ノ結果トシテ従来報告セラレタル病理解剖の所見(承前)」(リッベット述・佐多訳)	東医新	(747)
105	1892	0920	「所謂睡眠細胞ニ就テ」	東医学	6(18)
106	1892	0813	「ツベルクリン」ノ効用及該薬応用ノ結果トシテ従来報告セラレタル病理解剖の所見(七四七号ノ続キ)」(リッベット述・佐多訳)	東医新	(750)
107	1892	0815	「穿孔ニ依テ急性腹膜炎ヲ惹起シタル卵巣皮様囊腫ノ「デモンストラチオン」」	順天堂	(135)

No.	西暦	月日	タイトル	掲載誌	巻号
108	1892	1105	「天竺鼠及家兎ノ接種結核ニ対スル「ツベルクリン」ノ効力ニ就テノ試験成績」(抄)	東医学	6(21)
109	1892	1205	「冷血動物ニモ亦タ腎臓切除後糖尿病ヲ発スルカ」(抄)	東医学	6(23)
110	1893	0105	「人体血栓造構及血液製造器ニ於ケル血液小板ノ現存ニ就テ」(抄)	東医学	7(1)
111	1893	0405	「硝子様軟骨基質ノ生成及生物学的関係ニ関スル研究（睡眠細胞ノ一証説）」(抄)	東医学	7(7)
112	1893	0513	「転移性胃癌ニ就テ」	東医新	(789)
113	1893	0515	「転移性胃癌ニ就テ（総会ニ於テ）」	順天堂	(153)
114	1893	0520	「転移性胃癌ニ就テ（承前）」	東医新	(790)
115	1893	0530	「転移性胃癌ニ就テ（前号続）」	順天堂	(154)

備考は表2の備考を参照。

2 二つの調査報告

(1) 小田原コレラ調査

本調査の報告は「明治二十三年小田原地方虎列刺病調査報告」（以下「報告」と記す）と題して『東京医学会雑誌』に8回わたって掲載された¹³。これによると、調査のきっかけは、小田原地方で発生したコレラの流行状況が「頗ル興味アル」と耳にしたことだった。佐多は1890年11月23日に小田原を訪れて調査を開始し、12月15日に東京に戻った。この間、神奈川県警や足柄下郡役所の協力を得て、流行地を巡視し関係書類を閲覧した。当初は小田原町だけの予定だったが、調査を進めるなかで周辺にも対象範囲を拡大した。

「報告」では初めに、海外と日本の流行状況について統計データを使い9ページにわたって説明している。神奈川県での流行は7月30日に横浜から始まったという。それ以後10月31日までの郡市別の患者発生数を日ごとに整理したうえで、流行を抑えるために県が導入した施策を『官報』の記事によりまとめている。

「報告」のなかで注目されるのが、佐多が小田原の位置や地勢、町内の地区別人口・戸数、交通と用水の状況の説明に多くのページを割いていることである。なかでも用水に注目し、小田原では多くの家庭が「水道水」を得ており、井戸は寧ろかなり少ないと特記している。そして水道の経路を確認したうえで水道に沿ってコレラ患者が発生していることを指摘し、水源にまでさかのぼって調査したという。

佐多は、小田原で使われている用水の水源である早川の上流に位置する村で、最初に患者の発生した家を訪問した。その結果、家屋に隣接する細流が水道に流れ込んでおり、細流は木桶だけの「甚ダ不完全」な便所に接していると指摘した。次いで早川下流域の村に入り別の患者の家族から、汚れた衣服を洗った水が細流に流れ込んだとの証言を得た。

佐多は以上のことから、小田原でのコレラの流行は、水道の上流にある村で発生し患家の便所の汚物と

洗濯水が用水に混入したことによるものだと結論づけ、「『飲用水ハ虎列刺病ノ伝染ヲ媒介ス』トノ定説ヲ實際ニ徴証シタル顕著ノ一例ナリト認定」した。そして当局に対して、水道を山村の汚水が流入しない河川から引くこと、用水には沿岸の汚物を流入させないこと、水道を改良し毒物が地層を浸潤して水道に混入ないように改善すること、吏員を置き水質を常に検査することなどを提言して「報告」を締めくくった。

町では8月のコレラ患者発生後から、昼間は断水して飲用を禁じるなどの対応をとっており¹⁴、提言にそれほど大きな意味はなかったとみられる。しかし、佐多にとっては研究室を出て、患者の発生した地域に入り、住まいの状況を調べ家族への聞き取りも行なったこと自体が重要な「経験」になったとみられる。

(2) 北海道脚気調査

次に北海道で行われた脚気調査を検討しよう。すでに触れたように、佐多は1891年4月26日付で医科大学の「雇」に任じられており、この調査は医科大学を通じた正規の業務だった。「帝国大学第六年報」に「医科大学雇佐多愛彦ニ脚気病原取調材料蒐集ノ為メ北海道出張ヲ命」じたとある¹⁵。調査のきっかけは、函館の開業医で撰科生の桑原慶太郎が北海道北見地方で「水腫病」が多発しているとの報告に接したことだった¹⁶。これに疑問をもった桑原は自ら患者を診察してこれを脚気と診断したのである¹⁷。

そこで三浦守治は桂田富士郎を北海道に派遣し、次いで佐多を送り込んだ¹⁸。当時、脚気の原因について、伝染病説、中毒説、栄養障害説などが提出されるなか、三浦は「青魚中毒説」を主張しており、その証拠を集めようとしたのである。ところが佐多の調査は三浦の意に反して、青魚を食べない地域でも脚気が発生することを示し、「青魚中毒説」を否定する結果を示した。このことは医学史や科学史では知られている¹⁹。だが、ここでは佐多の調査手法に注目したい。

「北海道出張取調報告」（以下「取調報告」と記す）²⁰

の冒頭で佐多は調査の概要を説明している。それによると1891年6月23日に東京を立ち、汽船で25日に函館に着いた。30日に根室に入り、病院や郡役所、漁長を訪ねて調査に着手した。さらに数里離れた近村の鯨（ニシン）漁舎を巡回し漁舎で4日間寝泊まりしながら漁夫の生活を調査した。さらに屯田兵や根室監獄などを訪ねた後、北見硫黄山で坑夫の食物などを調べた。根室に戻ると「脚気病発生ノ巢窟」とされる昆布漁舎を10か所以上訪ねて4日間「漁夫ト寝食ヲ同フシ、親シク其生活、食物ノ状況等ヲ実験シ、且ツ一々従来ノ模様等ヲ尋問」した。その後、厚岸で昆布漁舎や小鯨漁舎を巡視し、釧路硫黄山でも調査を行なった。最後に釧路の病院と郡役所を訪問した後、釧路から函館を経由して東京に戻った。この間、往復日数17日を除いて調査に51日を費やした。

「取調報告」では、小田原コレラ調査と同様に、根室、北見、釧路の地勢、人口、地質、気候、交通、家屋、衣服、食物について詳述している。なかでも食物については、米を常食とし、麦飯はほとんどないと指摘し、季節ごとに獲れる魚の種類と貯蔵方法、当地でよく食される三平汁の調理法、飲料水の水質を記している。次いで、根室病院で入手した1886～91年の来院患者と脚気患者のデータをまとめ、脚気患者が「内地」と同様に盛夏に多く発生し、20～40歳の男性に多いと指摘した。そのうえで、「永住者」に比べて「寄留者」つまり内地からの出稼ぎ者に罹患する者が多いと述べている。

最後に、北海道でもっとも脚気が発生するのが各漁舎だとして、鯨漁舎と昆布漁舎のそれぞれの特徴をまとめ、「各漁舎ニ在テハ、「まぐろ」、「ぶり」、「かつほ」、「あじ」、「さば」等ノ青花族魚類ハ殆ド更ニ之ヲ見ルコト無シ」としたうえで「脚気病ノ発生ハ殊ニ昆布漁舎ニ夥シク又鯨魚乾燥期ニモ之ヲ生ス」と結論づけた。これはすでに述べたように青魚中毒説を否定する根拠となるものだった。

(3) 住民に対するまなごしの転回

小田原コレラ調査と北海道脚気調査の二つの調査はいずれも佐多を研究室の外の世界に連れ出し、現地住民との接触をもたらした。しかし両調査では現地住民へのまなごしに違いがある。前者では、聞き取りに際し「訪問ノ初メ先ツ当時ノ現状ヲ有ノ儘ニ陳述スベキ旨ヲ諭シ且ツ然カスルトキハ再度ノ流行ヲ防グノ手段アリトノコトヲ告ケ」質問に及んだという。それは「蓋シ事ノ大小ニ関セス当時ノ現状ヲ隠蔽シ更ニ陳述セザルハ田舎ニ於ケル病家ノ通弊ナレバナリ」という。佐

多の記録する患者家族への発問も詰問調で、住民への不信感がうかがえる。当時、コレラなどの感染症の流行に際して、各地で「患者隠蔽」が問題化していたのは事実だが²¹、佐多にとって患者家族は調査対象に過ぎなかった。

一方、北海道脚気調査では「取調報告」の冒頭で、「人情風俗」が内地とまったく異なるため、調査は困難を極めたものの、一定の成果をあげることができたのは「偏ニ各地ニ於ケル同業者諸君、漁業生産人諸氏、并ニ坑山事務員等諸氏が懇篤ナル補助ヲ与ヘラレタルニ因ル。余ハ之ヲ紙上ニ特書シテ、深く其厚誼ヲ鳴謝ス」と現地住民の援助に対する謝意を表した。「漁業生産人諸氏」や「坑山事務員等諸氏」を調査対象ではなく、調査協力者とみていた。

こうしたまなごしの変化には漁夫や坑夫らと寝食を共にするという調査手法が関わっていたのではないかと思われる。どうして佐多はそのような手法を用いたのだろうか。佐多の一年前に脚気調査を実施した桂田は、根室を訪れたものの、その調査は漁場を所有する二人の漁長からの聞き取りと帳簿の調査および「一ニノ漁場」の実見をわずか一日でこなし、さらに別の一日にもう一人の漁長の「私宅」で「漁場ノ状況ヲ探問シ且ツ同氏カ所有ニ係ル一ニノ漁場ヘ臨ミ調査」したという程度の簡易なものだった²²。

調査を命じた三浦も、その直前に江波とともに神奈川県三浦郡で実施した調査結果を発表したが、これは患者本人やその親族からの聞き取りをまとめたもので、患家の家族構成や病状の推移は詳細に描写するが、地域の人口や物産に関してはほとんど説明していない²³。調査に協力した医師や巡査、教員、役場職員への謝辞はあるが、患者家族への謝辞はない。こうしたことから、佐多に具体的な調査手法についてのアドバイスはあまりなかったのではないかと思われる。

以上のことから、漁夫らと寝食を共にするという調査手法の採用は佐多自身の判断によるものだったと考えられる。実際佐多は、「取調報告」の冒頭で次のように述べている。

或ハ病院ヲ訪ヒ、或ハ郡役所ニ到リ、或ハ各漁長ヲ尋ネ、以テ今昔ノ状況ヲ聴取シ、以テ該地特発ノ脚気患者ヲ診察シ、以テ漁舎ノ状況等ヲ聴取シ、終ニ該地方脚気発生ノ巢窟タル漁舎坑山等ヘハ自ラ出張シテ、雇夫ト寝食ヲ俱ニシ以テ實際ノ探究ヲ試ムルニ非ザルヨリハ、余ノ素望ヲ貫ク能ハザルコトヲ察シ、先ツ之ヲ各漁長ニ謀リテ、其脇贊ヲ請ヒタリ。

現場に足を踏み入れ漁夫と寝食を共にして「実際ノ探究」を試みなければ自らのかねてからの希望を叶えること、つまり成果をあげることはできないとみて、各漁長に協力を求めたというのである。

こうして佐多は、二度のフィールドワークを通して現地の住民とのかかわりを深めた。小田原コレラ調査では現場に足を運んだものの、患者家族を調査対象とみるにとどまったのに対して、北海道脚気調査では漁夫等と寝食を共にすることを通じてかれらへのまなごしを転回させることになったのではないかと考えられる。

3 研究の展開と社会的活動

(1) 市立富山病院から大阪医学校へ

佐多は、1893年5月27日付で富山県の市立富山病院の当直医となった。佐多は鹿児島医学校を卒業したが、同校は乙種医学校だったため医術開業免許を取得せず、そのまま撰科生になった。撰科は卒業しても医術開業免許が得られるわけではなかったため、佐多は撰科卒業に前後して医術開業試験の前期試験を受験し合格した後²⁴、小田原コレラ調査後の1891年6月に後期試験に合格した²⁵。だが、受理の手続きを怠っていたらしく、富山に赴任した時点では免許を得ていなかった。免許は、1893年6月14日になって同郷の後輩で当時撰科に在学中の高良善十郎が代理で受領した²⁶。富山赴任後3週間近く「無免許」だったことになる。

1年足らずで大阪医学校に転出したこともあり、富山時代には多くの研究成果をあげたわけではない。この間の著作をまとめた表2で確認しよう。初めての単著『病理組織及黴菌類顕微鏡的研究法』が目につくが、見逃せないのが『東京医学会雑誌』に十二指腸虫に関する研究を発表したことである。これは、富山への赴任後、十二指腸虫病の患者を相次いで診察したことから、富山を流行地の一つとみることはできないかとの仮説を論じたものである。研究を通じた地域への関心がうかがえるが、富山を離れた後には中断したようである。

1894年3月19日には佐多は、大阪医学校に新設された病理学教室担当の教諭になった。さっそく、大阪医学校関係者を中心とする大阪医学研究会の第3回春期総会（4月14日）に参加し、「医学上ニ於ケル病理解剖学ノ地位」を講演した²⁷。7月常会では「脳黴毒及継発シタル動脈炎ノデモンストラチン」を演説している²⁸。いずれも同研究会の『大阪医学研究会雑誌』に掲載された。佐多は、他にも従来からの研究テーマであるがんの発生論や腸チフスの血清、病理解剖の報告を同誌

に数多く載せた。

大阪医学研究会を舞台とした佐多の活躍には目覚ましいものがあった。『大阪医学研究会雑誌』には、同研究会が一時期不振に陥っていたものの、佐多が「熱心ナル尽力ト不撓ナル精神」でその立て直しに一役買ったと評価する投稿が掲載されている²⁹。大阪医学研究会は、1901年2月には元大阪医学校長の吉田顕三が主宰する興医会、緒方病院を中心とする緒方病院医事研究会という関西を拠点とする二つの研究会と合併して大阪医学会となるが、佐多はその際にも重要な役割を果たしたとされる³⁰。

この時期、佐多は生産性を向上させただけではなかった。質的にも注目される成果を公表している。1897年4月4日の東京医学会第10回総会で報告し、7月に『東京医学会雑誌』などに掲載された「正中葉萎縮ト神経変性トヲ兼ネタル筋萎縮性側索硬変」は、今日、日本初のALS剖検論文と評価されている³¹。

そうしたなか、1897年5月に佐多は眼科を専門とする今居真吉とともに大阪府費でもってドイツ留学に出発した。佐多の留学については別に論じたのでここでは結論だけを述べておきたい³²。佐多は3年に及ぶ留学で、ベルリン大学のルドルフ・ウィルヒョウ(Rudolf Ludwig Karl Virchow)に学んだ。ウィルヒョウは病理学の権威として名声を得ており、社会医学でも功績をあげ、同時に政治家としても活躍していた。「思想の根本唯だ之れを先生に負うのみ」と語るほどウィルヒョウに心酔した佐多は、「万人の平等という基本原理」のうえに医療制度を立ち上げるという志向に学ぶことで、「人命に尊卑なし、王侯貴人の体と田夫野老の体と其生を稟け世を終るに於て異なることなし」という平等観を前提に医師養成の統一を求める医育統一論を形成した。

佐多は1900年7月11日に帰国した。帰国後佐多は、留学中に執筆した「肺癆ニ於ケル混合感染ノ価値ニ就テ」「[「ベスト」ノ病原学及病理解剖学上ノ動物試験的増補第一]「皮膚及三ノ腺所謂蛋白腺中脂肪ノ存在ニ就テ」「諸細胞ニ因リテ脂肪ノ産出セラル、コト並ニ切片内放腺状菌ノ新染色法ニ就テ」の四本の論文を帝国大学に提出し12月5日付で医学博士の学位を授与された³³。表2にみるように、1900年から翌年にかけて佐多が医学雑誌に発表した論文の多くは学位論文をもとにしたものだったとみられる。

大学昇格運動の「経験」的基盤

表2 佐多愛彦の著作一覧 (1893~1902年)

No.	西暦	月日	タイトル	掲載誌	巻号
116	1893	0820	「十二指腸虫ニ関スル実験」	東医学	7(16)
117	1893	0905	「十二指腸虫ニ関スル実験(続)」	東医学	7(17)
118	1893	0920	「アダムキエツ氏ノ新癌腫説ヲ駁ス」(抄)	東医学	7(18)
119	1893	1010	「病理組織及黴菌類顕微鏡的研究法」英蘭堂・吐鳳堂		
120	1893	1120	「虎列刺ニ対スル人体ノ免疫試験」(抄)	東医学	7(22)
121	1894	0105	「糖尿病ニ対スル血球ノ関係」	東医学	8(1)
122	1894	0504	「医学上ニ於ケル病理解剖学ノ地位」	大医研	(20)
123	1894	0601	「医学上ニ於ケル病理解剖学ノ地位(承前)」	大医研	(21)
124	1894	0630	「医学上ニ於ケル病理解剖学ノ地位(承前)」	大医研	(22)
125	1894	0720	「病理解剖学」上巻, 吐鳳堂書店		
126	1894	0730	「脳黴毒実験」(井上平蔵・佐多)	大医研	(23)
127	1894	0920	「右上顎骨腫瘍実験」(井上平造・佐多共述)	東医学	8(18)
128	1894	0924	「右上顎骨腫瘍ノ実験」(井上平蔵・佐多)	大医研	(24)
129	1895	0306	「細胞核ノ病理的变化ニ就テ」	大医研	(26)
130	1895	0306	「第十三回病理解剖報告」(佐多述・田中祐吉記)	大医研	(26)
131	1895	0306	「鑑定実例」	大医研	(26)
132	1895	0420	「細胞核ノ病理的变化ニ就テ(続)」	大医研	(27)
133	1895	0420	「第十六回病理解剖報告」(佐多述・中桐脩炳記)	大医研	(27)
134	1895	0420	「第十七回病理解剖報告」(佐多述・安部禎吉筆記)	大医研	(27)
135	1895	0420	「癌腫ノ發生論ニ就テ」(抄訳)	大医研	(27)
136	1895	0420	「鑑定実例」	大医研	(27)
137	1895	0619	「第十八回病理解剖審査報告」	大医研	(28)
138	1895	0706	「硫酸中毒屍ノ解剖の処見」(佐多・田中祐吉共述)	東医新	(901)
139	1895	0719	「硫酸中毒屍ノ解剖の処見」(佐多・田中祐吉共述)	大医研	(29)
140	1895	0719	「円形胃潰瘍一胃癌一癌種性腹膜炎」(佐多・松井義邦共述)	大医研	(29)
141	1895	0719	「第十九回病理解剖審査報告」(佐多述・山田泰二記)	大医研	(29)
142	1895	0719	「第二十回病理解剖報告」(佐多述・加野春夫記)	大医研	(29)
143	1895	0720	「硫酸中毒屍ノ解剖の所見」	医海時報	(70)
144	1895	0805	「円形胃潰瘍一胃癌一癌種性腹膜炎」(佐多・松井義邦共述)	中外	(369)
145	1895	0905	「癌細胞核ノ形態学的研究」	東医学	9(17)
146	1895	0917	「細胞核ノ病理的变化ニ就テ(続)」	大医研	(30)
147	1895	0917	「第二十一回病理解剖審査報告」(佐多述・上村平作記)	大医研	(30)
148	1895	0917	「法医学的鑑定実例」	大医研	(30)
149	1895	0917	「在京偶感」	大医研	(30)
150	1895	1005	「癌細胞核ノ形態学的研究(続)」	東医学	9(19)
151	1895	1130	「第二十二回病理解剖審査報告」	大医研	(31)
152	1895	1231	「細胞核ノ病理的变化ニ就テ(続)」	大医研	(32)
153	1896	0309	「第二十三回病理解剖」	大医研	(33)
154	1896	0620	「腸窒扶斯血清ニ就テ(其一)」	東医新	(951)
155	1896	0620	「血栓發生論ニ関スルー例証」	中外	(390)
156	1896	0629	「時勢の変化」	校記事	(2)
157	1896	0714	「腸窒扶斯血清ニ就テ(其一)」	大医研	(34)
158	1896	0714	「血栓發生論ニ関スルー例証」	大医研	(34)
159	1896	0714	「本年初発ノ「コレラ」患者報告」	大医研	(34)
160	1896	0714	「第二十四回病理解剖審査」	大医研	(34)
161	1896	0714	「新刊ルバルシユ氏病理学ヲ讀ム」	大医研	(34)
162	1897	0131	「寄生虫検査法」	医談	(41)
163	1897	0415	「正中葉萎縮と神経硬変とを兼たる筋萎縮性側索硬変」	済生	(52)
164	1897	0705	「正中葉萎縮ト神経変性トヲ兼ナル筋萎縮性側索硬変」	東医学	11(13)
165	1897	0710	「正中葉萎縮ト神経変性トヲ兼タル筋萎縮性側索硬変」	東医新	(1005)
166	1897	0715	「寄生虫検査法」	大医研	(35)
167	1897	0720	「正中葉萎縮ト神経変性トヲ兼ナル筋萎縮性側索硬変(続)」	東医学	11(14)
168	1897	0724	「正中葉萎縮ト神経変性トヲ兼タル筋萎縮性側索硬変(承前)」	東医新	(1007)
169	1900	0820	「ペスト病ノ原因及病理解剖ノ試験的追加」	中外	(490)
170	1900	0905	「ペスト病ノ原因及病理解剖ノ試験的追加(承前)」	中外	(491)
171	1900	1005	「ペスト病ノ原因及病理解剖ノ試験的追加(承前)」	中外	(493)
172	1900	1020	「ペスト病ノ原因及病理解剖ノ試験的追加(承前)」	中外	(494)

No.	西暦	月日	タイトル	掲載誌	巻号
173	1900	1120	「ペスト病ノ原因及病理解剖ノ試験的追加（承前）」	中外	(496)
174	1900	1124	「大阪に於けるペストの実験」	医海時報	(338)
175	1901	0105	「結核の臨床的症狀及び経過ニ対スル混合伝染ノ価値」	東医新	(1186)
176	1901	0210	「諸種細菌ニ因スル脂肪形成及び組織切片ニ於ケル放線状菌ノ新染色法」(佐多述・田中祐吉訳)	校雑誌	(11)
177	1901	0216	「結核の臨床的症狀及び経過ニ対スル混合伝染ノ価値（承前）」	東医新	(1192)
178	1901	0323	「地理歴史上ペストの特性」	医海時報	(355)
179	1901	0330	「地理歴史上ペストの特性（続）」	医海時報	(356)
180	1901	0518	「動物体死後の脂肪形成に就て」(佐多・下方正信)	医海時報	(363)
181	1901	0525	「病的組織ニ於ケル脂肪ノ発現ニ就テ」(佐多述・田中祐吉訳)	医事新聞	(590)
182	1901	0610	「病的組織ニ於ケル脂肪ノ発現ニ就テ（承前）」(佐多述・田中祐吉訳)	医事新聞	(591)
183	1901	0629	「諸種細菌ニ因スル脂肪形成及び組織切片ニ於ケル放線状菌ノ新染色法」(佐多述・田中祐吉訳)	東医新	(1211)
184	1901	0710	「病的組織ニ於ケル脂肪ノ発現ニ就テ（承前）」(佐多述・田中祐吉訳)	医事新聞	(593)
185	1901	0820	「結核予防法附保養院問題」	通俗衛生	(37)
186	1901	0825	「病的組織ニ於ケル脂肪ノ発現ニ就テ（承前）」(佐多述・田中祐吉訳)	医事新聞	(596)
187	1901	1111	「コッホ氏ノ新発見人牛結核ノ差異ニ就テ」	大医学	1(4)
188	1901	1220	「結核の防滅法 附保養院」	中外	(522)
189	1902	0101	「医育論」	医海時報	(395)
190	1902	0111	「医育論（承前）」	医海時報	(396)
191	1902	0118	「医育論（承前）」	医海時報	(397)
192	1902	0125	「医育論（承前）」	医海時報	(398)
193	1902	0412	「再び動物体死後の脂肪形成に就て」	東医新	(1251)
194	1902	0425	「動物体ノ死後脂肪形成ニ就テ」	医事新聞	(612)
195	1902	0425	「細胞毒ニ関スル研究」	医事新聞	(612)
196	1902	0524	「人牛結核の差異に就て」	東医新	(1257)
197	1902	0610	「牛結核ノ差異ニ就テ」	医事新聞	(615)
198	1902	0811	「血球溶解素ト細胞毒」(佐多述・塚口利三郎筆記)	大医学	2(1)
199	1902	1005	「動物組織ノ死後脂肪形成」(佐田（ママ）・下方正信共述)	東医学	16(19)
200	1902	1011	「ウィルヒョウ先生を哭す」	大医学	2(3)
201	1902	1108	「博愛社を訪ふ」岡田二郎編『博愛社』博愛社		
202	1902	1211	「孤児救済法ニ就テ」	大医学	2(5)
203	1902		「病原研究上病理解剖学的知見の必要」	進歩	2(17)

備考 ①掲載誌の略号は以下のとおり。

東医学：『東京医学会雑誌』，東医新：『東京医事新誌』，中外：『中外医事新報』，医事：『医事新聞』，順天堂：『順天堂医学研究会報告』，済生：『済生学会医事新報』，大医研：『大阪医学研究会雑誌』，大医学：『大阪医学会雑誌』，校記事：『大阪医学学校校友会記事』（大阪府立中之島図書館所蔵），校雑誌：『大阪医学学校校友会雑誌』，進歩：『医界之進歩』

②記事タイトルの後の（ ）内は，基本的に記事本文の付記もしくは目録の記載に従った。

③佐多愛彦先生古稀寿祝賀記念事業会編『佐多愛彦先生論文集』佐多愛彦先生古稀寿祝賀記念事業会（1940年）所収の「佐多愛彦博士著作論文総目録集」，『東京医学会雑誌』51巻特輯号（1937年）所収の「東京医学会雑誌総索引」，国立国会図書館オンラインシステムなどにより作成。

（2）ペスト対策への取り組み

佐多が帰国した1900年7月，神戸と大阪はペスト流行の只中にあった。1899年11月8日，神戸市で初めてペスト患者発生が発生した。大阪市では11月18日に患者を確認し，翌年にかけて断続的に多くの感染者を出したのである。1900年1月中旬までに大阪市内で41名を確認した。一旦は小康状態となったが，4月8日に再び患者が発生し7月までに患者は50名に及んだ。その後8月12日に検分された死体がペストによるものと判明し，患者は12月27日までにさらに70名を数えた³⁴。

佐多は，先に述べたように博士論文でペストを取り上げた。帰国後初の論文は『中外医事新報』第490号（1900年8月20日）から第496号（11月20日）にかけて

掲載した「ペスト病ノ原因及病理解剖ノ試験的追加」だった。これは，博士論文の第二論文をもとにしたもので，日独のペストに関する症例，病理的研究，動物実験に基づく研究を整理し，自身の動物実験によりペストの基本的な病態を検討したものだ。

注目されるのは，こうした病理学的研究を発表する一方，佐多が防疫体制についても意見を公にし始めたことである。帰国直後，大阪朝日新聞の取材に対し，大阪府の検疫が斃鼠の細菌学的検査に止まっているが，病理解剖により伝染状況を確認すべきだ，検疫本部に研究所を設け優秀な医師を雇用し検疫策を立案させるべきだと述べた³⁵。1900年11月には『医海時報』に「大阪に於けるペストの実験」を投稿し，ペスト発生地で

の鼠駆除の励行に止まらず、斃鼠がペストによるものか検証することが重要だなどと主張した³⁶。

行政側も佐多に対してペスト対策への専門的知見の提供を求めた。佐多は1900年9月に地方衛生会臨時委員に就任し、12月に勅令第410号をもって大阪府に臨時ペスト予防事務局が設置されることになると、大阪府は内務大臣に次のように内申した。

右者当府立大阪医学校教諭トシテ病理学及細菌学研究ノ為メ曩ニ三年間独逸ニ留学シ斯道ノ蘊奥ヲ窮メタル者ニ有之候処、当府現下ノ状況ニ於テペスト防疫上細菌学精通ノ技師必要ニ付頭書ノ通御任用相成候様致度別紙履歴書相添へ此段及内申候也³⁷

大阪府はドイツに3年間留学し病理学・細菌学を究めた者として防疫局への任用を求めたのである。

これを受けて佐多は臨時ペスト予防事務局の第一部長に就任した。第一部長は事務局におかれた6部の一つで、細菌検査を担当した³⁸。第一部長として佐多は生活に密接にかかわるペスト菌の実験を進めた。たとえば1901年4月の伝染病研究所同窓会第3回大会において、水中での斃鼠体内のペスト菌がどれくらいの期間毒力を保持するか、あるいはペストによる斃鼠を食した猫の糞便にペスト菌が含まれるのかといったことの検証など、部員に行なわせた研究成果を「「ペスト」菌ニ関スル二三ノ実験」として報告している³⁹。

おわりに

佐多は帝国大学医科大学の撰科生となり三浦守治のもとで病理学を学んだ。病理学の研究成果を精力的に発表するなか、小田原と北海道でフィールドワークを行なった。富山に赴任すると地域で広がる病気にも関心を寄せ、大阪に転じてドイツ留学の機会を与えられるとウィルヒョウの影響下で医育統一論を形成した。帰国後には流行していたペスト対策のために提言を公表するようになり、大阪府の求めに応じて防疫業務にかかわった。このように佐多は研究活動を通じて、顕微鏡下の標本観察から大学の外の世界へと関心と活動の場を広げていくことになったと考えられる。

こうした「経験」の過程で注目されるのが調査先の住民に対する佐多のまなざしが転回したことである。小田原では調査に協力した患者やその家族をたんなる研究対象と捉えていたのに対して、北海道脚気調査では住民を研究対象ではなく研究協力者とみなすようになった。この転回は、研究のために必要と自らの判断

で採用した、漁夫らと寝食を共にするという調査手法がもたらしたものであった。

北海道脚気調査の「取調報告」から、佐多が彼らの暮らしをつぶさに観察したことがわかる。漁夫のほとんどは秋田、青森、津軽、庄内などからの出稼ぎ人だった。ニシン漁期の4月初旬から7月中旬まで彼らが過ごす鯨漁舎は大きな一つの家屋で、内部は船頭の居室と漁夫の居室に分かれ、前者は「稍清潔」だが、後者は「極メテ不潔」だという。食事は米飯だが副食物は魚類のみで漁期にはニシンを多く食す。一方7月下旬から8月中に行なわれる昆布漁のために作られる昆布漁舎には屋根しかなく、砂上に筵か板を一枚挟む程度でそこで寝起きする。食事は「最モ粗」で小魚を捕えることができれば「上食」だと佐多は記している。

粗末な宿所で粗食に堪えて働く漁夫らと寝食を共にし、その生活を詳細に記録したことは彼らに対する理解の深化を佐多にもたらしたことだろう。約10年後に執筆した「医育論」において佐多は、先に触れたように「王侯貴族」も「田夫野老」も命では平等なので医育統一が必要だと主張したのだが、「田夫野老」はたんなるレトリックではなく顔を持った実人として佐多の議論に大きな力を与えることになったのではないか。

佐多は、1902年2月に大阪府立医学校の臨時校長・病院長代理に就任し、5月に正式に校長兼病院長になった。そして1903年の春には大阪府に「大阪医学校大学部設立要旨」と覚書を提出して大学昇格運動を開始する。佐多が展開した大学昇格運動は、学校運営に責任をもつ立場となるまでに、研究活動を通じて得た大学の外の世界とのかかわりという「経験」によって支えられたものだったといえるだろう。

〔付記〕

本研究はJSPS科研費19K02395および21K18504の助成を受けたものです。

〔注〕

- 高梨光司『佐多愛彦先生伝』佐多愛彦先生古稀寿祝賀記念事業会、1940年。
- 東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史』資料一、東京大学、1984年、628ページ。
- 前掲『佐多愛彦先生伝』33～35ページ。以下、佐多の経歴については注記のない限り本書による。
- 『帝国大学一覧 明治21-22年』217～220ページ。
- 『人事興信録』初版（1903年4月）。ただし名古屋大学法学研究科の「『人事興信録』データベース」を利用した（<https://jahis.law.nagoya-u.ac.jp/who/docs/>

- who1-2442, 2022年6月20日最終閲覧）。
- ⁶ 日本科学史学会編『日本科学技術史大系』第24巻・医学〈1〉, 第一法規出版, 1965年, 266ページ, 宇留野勝弥「遠山椿吉」(私家版)1968年を参照。
- ⁷ 吉川卓治『公立大学の誕生—近代日本の大学と地域—』名古屋大学出版会, 2010年, 60ページ。
- ⁸ 佐多「恩師三浦守治先生の追想(二)」『医事公論』第170号, 1916年9月22日, 3ページ。
- ⁹ 竹崎季薫・佐多愛彦「結核病屍剖観記事」『東京医学会雑誌』第3巻第16号, 1889年9月5日。
- ¹⁰ 竹崎季薫・佐多愛彦「胃癌病屍剖観記事」『東京医学会雑誌』第3巻第17号, 1889年10月20日。
- ¹¹ 雇員制度については, 石井滋「非官吏制度の研究—戦前期日本における雇員・傭人・待遇官吏・囑託制度の成立と変遷—」(グイーツソリューション, 2016年)を参照。
- ¹² 「学内往復目録 明治二十六年」(S0005/17) 東京大学文書館所蔵。
- ¹³ 『東京医学会雑誌』第5巻第3号(1891年2月5日)から第5巻第11号(1891年6月5日)まで掲載された。ただし第5巻第5号にはない。煩雑さを避けるため本報告からの引用は注記を略した。
- ¹⁴ 片岡永左衛門編著『明治小田原町誌』巻ノ三, 1931年。ただしここでは, 小田原市立図書館編『小田原市立図書館郷土資料集成2 明治小田原町誌(翻刻版)中』1975年, 98ページによった。
- ¹⁵ 本稿では複製版を用いた(東京大学史料研究会編『史料叢書 東京大学史 東京大学年報』第3巻, 東京大学出版会, 1993年, 299ページ)。
- ¹⁶ たとえば, 飛田一脩「明治二十一年北見国地方水腫病調査成績」『東京医学会雑誌』第4巻第10号, 1890年5月20日。
- ¹⁷ 桑原慶太郎「北海道ニ於ケル水腫病(脚気)ニ就テ」『東京医学会雑誌』第4巻第24号, 1890年12月20日。
- ¹⁸ 佐多愛彦「恩師三浦守治先生の追想(三)」『医事公論』第171号, 1916年9月29日, 4ページ。
- ¹⁹ 山下政三『脚気の歴史—ビタミンの発見—』思文閣出版, 1995年, 187~195ページ, 板倉聖宣『模倣の時代』上, 仮説社, 1988年, 430~431ページ。
- ²⁰ 『東京医学会雑誌』第5巻第18号(1891年9月20日)から第6巻第3号(1892年2月5日)。ただし第6巻第1号第2号には掲載がない。煩雑さを避けるため本報告からの引用は注記を略した。
- ²¹ 竹原万雄『近代日本の感染症対策と地域社会』清文堂, 2020年を参照。
- ²² 桂田富士郎「北海道北見根室両国ニ於ケル漁夫生活之状態ト脚気病トノ関係」『東京医学会雑誌』第4巻第15号, 1890年8月5日, 30~35ページ。
- ²³ 三浦守治・江波知輝「明治廿二年ニ於ケル三浦郡ノ劇症取調績成」『東京医学会雑誌』第4巻第7号(1890年4月5日)および同「明治廿二年ニ於ケル三浦郡ノ劇症取調績成(前号之続)」第4巻第8号(1890年4月20日)。
- ²⁴ 「医術開業試験及第者」『官報』第2102号, 1890年7月3日, 38ページ。なお官報上では名前が「佐田」と誤記されている。
- ²⁵ 「医術開業試験及第者」『官報』第2381号, 1891年6月9日, 125ページ。
- ²⁶ 「明治廿六年度普通第一種 庶政要録 医師免状請書 第五課」(620.D7.11) 東京都公文書館所蔵。
- ²⁷ 「本会記事」『大阪医学研究会雑誌』第20号, 1894年5月, 34ページ。
- ²⁸ 「本会記事」『大阪医学研究会雑誌』第23号, 1894年7月, 31ページ。
- ²⁹ 武羅布生「大阪医学研究会ノ再興ヲ祝シ併テ会員諸君ニ望ム」『大阪医学研究会雑誌』第38号, 1897年10月, 18ページ。
- ³⁰ 某「大阪より」『医海時報』第351号, 1901年2月23日, 12~13ページ。
- ³¹ 阿部康二「日本における amyotrophic lateral sclerosis (ALS) の初期論文とその今日的考察」『臨床神経学』第57巻第4号, 2017年。
- ³² 吉川卓治「一九世紀末における一医学徒のドイツ留学—佐多愛彦における「医育統一論」の成立—」加藤詔士ほか編『西洋世界と日本の近代化—教育文化交流史研究—』大学教育出版, 2010年。
- ³³ 『官報』第5232号, 1900年12月8日, 131~133ページ。
- ³⁴ 臨時ペスト予防事務局『大阪府ペスト病流行記事』1902年, 4~8ページ。
- ³⁵ 「佐多氏の検疫談」『医海時報』第321号, 1900年7月28日, 6~7ページ。
- ³⁶ 「大阪に於けるペストの実験」『医海時報』第338号, 1900年11月24日, 7~12ページ。
- ³⁷ 「明治二十九年 秘書類」(B0-0059-15) 大阪府公文書館所蔵。
- ³⁸ 前掲『大阪府ペスト病流行記事』117~120ページ。
- ³⁹ K, I, 生「伝染病研究所同窓会第三回大会」『医事新聞』第588号, 1901年4月25日, 22~25ページ, 「伝染病研究所同窓会大会講演略記(承前)」『東京医事新誌』第1203号, 1901年5月4日, 19~22ページ。

Experiential Foundations of the University Elevation Movement in Prewar Japan: From Research to Movement

Takuji YOSHIKAWA*

This research investigates the underlying reasons for the social devotions of Aihiko Sata, as a leader who helped elevate the status of Japanese medical university. Sata was born in Kagoshima in 1871. He first learned pathology in an elective course of the Imperial University. After graduation, he continued to work as a part-time assistant at the Medical School of Imperial University, where he wrote many papers based on his microscope research of various specimen, as well as his fieldwork.

His first fieldwork was an investigation of the plague disease epidemic in Kanagawa Prefecture in 1890. In his recordings he noted his shock with the status of the subjects infected. In 1891, his second fieldwork was done in Hokkaido, where leg ailments were prevalent. Sata slept and ate with the residents, many of whom were poor fishermen. This proximity to their lives attracted his attention to their dilemmas.

In 1891 Sata became a teacher of Osaka Medical School. From 1897 to 1900 he studied abroad in Germany under Rudolf Ludwig Karl Virchow, a world-renowned pathologist. Immediately upon his return, Sata began his social activities. He worked firmly with the belief that the weight of life is equal for both prince and pauper, young and old, rich and poor-- there should be no difference in the qualifications of the physicians, nor in the attitude of who deserves treatment. This research suggests that Sata's belief may have been informed by his experiences as a young man. Later, he lobbied the Ministry of Education to elevate the Osaka Medical School to Osaka Medical University, which became the first public university in Japan.

* Professor, Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University

